

鈴木校長、突然の辞任

昭和七年四月、三回生が最上級生となった新学期早々のことである。鈴木校長辞任のニュースが校内を駆けめぐった。「だるま校長」の異名で親しまれ、とらえどころのない東洋風の哲学者として全校生徒の精神的支柱となっていた鈴木が学校を去るといふニュースに、生徒たちが少なからず動揺したのは当然のことであった。四、五年生の有志の生徒たちは引き止めを画策し、夜分岩手公園に集まって策を練った。三田邸を訪ねて鈴木留任を嘆願したり、鈴木邸を訪ねて翻意を促したりしたが、事態はもう生徒の力ではどうにもならないところまで進んでいた。鈴木は一身上の都合で辞めるのだからと優しく生徒を諭すだけだった。

鈴木告別式は四月二日に執り行われた。鈴木はここでも辞任の理由については触れず、講堂の隅々から別れを惜しむ生徒たちのすすり泣く声が聞こえるなか、将来ある教え子たちをこう励ました。

「岩手山麓に放牧されて悠々と草を食んでいる馬が、やがて南部の駿馬として天下に名だたるように、やがて君たちのなかからもきつと国家有為の人材が出てくるであらう。私はそれを期

待してやまない」

翌四月二三日には紫波の城山までの送別行軍が行なわれた。天気の良い日だったが、生徒たちはみなしんみりして、朗らかに愉快にと言われてもどうしても沈みがちな行軍だった。五月一日、呉一中の校長へと転任する鈴木は盛岡を発った。岩中生は全校で駅へ赴き、音楽の武田忠一郎教師の指揮による校歌の大合唱で鈴木に乗る汽車を見送った。

鈴木校長辞任の背景に、「時代」というものを感じないわけにはいかない。生徒の個性を尊重し、すなおに伸ばしてやりたいとする鈴木の自由主義的な教育理念。しかし世の中は、すでにそういった気風を許さない方向に音をたてて急旋回しつつあった。

時代の趨勢と学園内の動きとは、けっして無縁ではない。それどころか、新しい知識をつぎの世代に伝達し、明日を背負う人材を育成するのが学園の使命である以上、むしろ時代を一步先取りした動きのあらわれるほうが、より本来の姿に近いであろう。

拡大の一途をたどる戦況、すなわち国家が直面する非常事態をうけて、創立者たる義正翁が時代の要請に応えるべく校風の一大改革を望んだのだとすれば、鈴木校長とのあいだに軋轢が生じたとしても仕方のないことだったのかもしれない。



鈴木卓苗校長送別会（昭和8年）